

皆様、明けましておめで  
とございます。

今年亥(イノシシ)年  
で、昔から猪突猛進とい  
う諺がありますが、新年の三  
ヶ日、長崎地方はやや曇天  
模様だったこともあり、ま  
ずは穏やかなスタートが  
されたのではないでしょ  
うか。

考えてみれば、十二月三  
十一日と翌年一月一日と  
は単に夜中の零時を境に  
して時が瞬時に過ぎるだ  
けですが、古来東洋では新  
年ということでかなり派  
手な種々慶賀行事をする  
習わしがあります。

この点西洋では、新年よ  
りもむしろクリスマスイ  
ブをキリスト生誕の日と  
して祝うようです。しかし  
日本のようにやれケーキ  
だ、やれプレゼントだ、で

はなく、まず近くの教会で  
敬虔なミサをあげるため  
家族全員で参加するのを  
最も大切な習慣としてい  
ます。

それにしても、齢を重ね  
る毎に、なんと一年間の過  
ぎることの早いことが、少  
し恐ろしいくらいに感じ  
るのは筆者だけでしょう  
か。

今年ある方からの賀状  
に、「若い時は、今年こそ  
今年こそとの新たな誓い  
などを立てたものである  
が、最近では正月が来ると  
今年も家族全員が無事で  
平穏な一年であることを  
祈る気持ちの方が強くな  
ってきた」と記されていま  
したが、まさにそういう心  
境もある面大切なことが  
も知れませぬ。それだけ  
いろいろ昨今は、想定外の  
ことが種々多過ぎるとい  
うことでもありませんか。  
今年も我々合気万生道

を自分の人生の生きる糧  
にして修業に励む者は、常  
に前向きに、そして真面目  
に稽古だけでなく、日常生  
活においてもこのことを  
肝に銘じて生きていくべ  
きでしょう。

それにしても年末から  
年始にかけては本当に低  
俗なテレビ番組が多く、し  
かしこれらの番組のほと  
んどは旧年中に撮り貯め  
されたものという感じを  
受けるのは皆さんも経験  
があたりでしょう。

そのような中、今年もア  
マチアスポーツでは生放  
送での感動の名場面をテ  
レビでじっくり見ること  
ができました。

一月二日から三日にか  
けて予選落ちのチームか  
ら早い選手を集めて選抜  
された一チームを含めて、  
合計二十チームが参加し  
ての東京箱根間往復大学  
駅伝、今年は順天堂大学が

久しぶりの総合優勝を飾  
りました。その立役者は往  
路、小田原から箱根までの  
約二十数強を、その距離の  
長さもさることながら高  
低さ約八百mを一気に駆  
け上った今井選手(四年  
生)でしょう。

ちょうど島原から雲仙  
ゴルフ場横のピークを経  
て雲仙温泉街に至る、それ  
よりも急なコースを約一  
時間ちよつとで走ってく  
るようなものであり、その  
凄さが分かります。

この選手は福島県原町  
出身で、四年間のうち今回  
も入れて三度この区間で  
区間賞を取りました。

しかし、たった一日の箱  
根の山の上り快走のため物  
凄いトレーニングをして  
きたことだけでなく、主将  
としてチームをまとめる  
ために苦勞してきたその  
努力には頭が下がります  
た。

また、八日に行われた第  
八十五回全国高校サッカー  
選手権で見事岩手県勢  
として岡山県代表の作陽  
高校に逆転勝ちして初優  
勝を飾った盛岡商業高校  
の快挙も感動的でした。

ここの斉藤監督は五九  
歳、大学卒業後岩手県内の  
県立高校でサッカー指導  
一筋、熱血指導で無理がた  
たり一五年前には喉頭ガ  
ンでしわがれた声に、また  
昨年秋のこの大会直前  
には冠動脈血栓で心臓のバ  
イパス手術を受けるなど  
まさに病氣、また地方とい  
うハンディと戦いながら  
の栄冠で、優勝インタビュー  
を聞きながら筆者も涙  
してしまいました。

「礼儀について」  
武道において礼儀はな  
くてはならないものであり、  
また、礼儀によって武道の  
精神も引き継がれて行く  
のである。

このことは、一流派のみの武道でなく、日本古来の武道はそのほとんどが「礼に始まり礼に終わる」というまさに武士道の精神の表われである。

どんな武道でも礼儀がない武道はない。また、武道のみの世界でなく、囲碁・将棋の世界でもそれは実践されている。

囲碁も将棋もプロ同士の世界での闘いは当然凄まじいものであるが、しかし、勝敗の結果がついた時点で互いの表情は、どちらが勝ったか負けたか分からない表情であり、「勝ったほうはもう少し喜びを表してもいいのでは？」と思うくらいであるが、それはやはり相手に対する礼儀ということである。

つまり、「勝つ」ということは相手がいるからこそ発生したものであり、その相手に対する敬意があ

るからこそ勝負が成り立っているものということである。

また、相撲でも勝った力士は負けた力士に対して手を差しのべる光景は、昔はよく見たものである。

こうしたことは、日本文化の表われであり、昔、外国人が日本人のこのような精神を見たときに、何と素晴らしい精神文化の持ち主かと驚いたという。

我々はこうした精神文化を残すように相手に対することを重んじるように自己を高めて行きたいものである。

そして幸いにして、自身合気道という武道をしている。まさに合気道は、相手とは争わない、また、相手と一体となることを主流においているため、相手を重んずる武士道の精神そのものである。

試合こそないが、精神は

他の武道と引けをとらないような姿勢と努力を重ねて行きたいものである。

「礼儀が先か、技の上達が先か」の疑問が以前あったが、「礼儀が先」である。

それは何故か、相手を思う気持ちがないと当然合気道の場合はゲガをするし、体がいくらあっても足りない。

それがやがて発展してくると「きちがい刃物」であり、砂泊先生が「昔、大阪で大変強い植芝先生の弟子がいて、強さを道場外でも振るっていたのだが、居酒屋で背後から刺されて殺され、そのことを植芝先生に伝えたところ『あの者は強すぎたんだ』という一言であった。その人は合気道界では二度と出現しないだろうという大変強い人物であった。」ということを言われる。

要するに、人間は強いこ

とはそれでいいのかもしれないが、それよりも人間としての精神がそれ以上に備わっていることが必要であり、それがないと身を滅ぼす結果ともなるというところが砂泊先生の教えであることがうかがえる。

したがって、相手を思う気持ちのままでは優先し、稽古に励むべきである。

幼年部の稽古風景は、常に礼儀を優先した稽古をしている。

このことは、子供達には「相手を思う気持ち」ということがすぐには分からずとも、体をもって教えを受けていると、それが次第に後から分かってくるものである。

「おねがいします。ありがとうございます。」だけでも日常の社会生活の中で言えるのと言えないのでは雲泥の差である。

こうした教えを小さい頃から受けることは、本当に意義があると思う。

それがやがて、社会においても役立つことがきつとくる。

「強ければいい、実力があればいい」果たしてそれでいいのか。やはりそこに精神が伴わなかったらいけない。

礼儀が果たす役割は、まさに大きいのである。(平成十七年二月 浜田)

旅シリーズ、今号はお休みさせていただきますので、ご容赦下さい。

寒い、寒いと言いながらも春はもうすぐそこまです、風邪などひかぬよう(今年是一年間風邪をひかないという誓いが、最も健康的で凄いいことかも知れませんが)ご留意下さい。寒くとも たもとにいれよ 西の風 弥陀の国から 吹くとおもわば